

氏名	吉井 ころろ
ヨミガナ	ヨシ コロ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第737号
学位授与年月日	2024年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 思考過程におけるガラス造形—言葉とモノとの往環— 〈作品〉 言葉とモノ

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	藤原 信幸
（論文第1副査）	長岡造形大学	教授		小松 佳代子
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	三上 亮
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	椎名 勇
（副査）	東京藝術大学	特任教授	（グローバルサポー トセンター）	井谷 善恵

（論文内容の要旨）

幼少時に潮だまりを覗いた時、そこに広がる異世界に魅了された経験が筆者のガラス作品制作の原点である。この「異世界」が潮溜まりから、文学の中にある精神世界や哲学、宗教の言説に展開していった。筆者にとって異世界とは現実と非現実を反復する「過程」である。物理学や数学など理論上のみ存在する虚数のような、現実世界には存在しないが認識され、そこでの理論が正数の世界にフィードバックされることで成立する関係と同様である。筆者はこの異世界の視覚化をコンセプトとし、言葉をモチーフにガラス作品を制作している。

本論文は、ガラス作家の視点から、文学をはじめとした言説を理解する為の自作品の意義と作品制作で得た独自の内部彫刻（インナースカルプチャー）技法「虚実技法」及び内部彩色技法「虚彩技法」を提示する。筆者は、言葉をガラス内部に視覚化し、理解する過程を作品で表現してきた。現代社会において私たちの感性や精神に影響を及ぼす物の殆どが、人工物で構成されている。この事実を認識し人工物である言葉の、言語化以前の存在を、ガラス造形を通して探究することで、人工物から人間へ回帰する可能性の示唆を得ることが本論文の目的である。

第1章では、筆者の制作のプロセスを実例と共に示した。言葉とその本質との狭間に注目し、その齟齬を立体とみなすことで、文章や建築物など人工物として確立しているものの起源を見る方法を探究するのが筆者の制作である。ガラス内の空洞と外形を同時に制作することで虚と実、正負を逆転させる手法を取りながら言葉や行間に隠された異世界の表現を、遺跡などの建造物の形態に求め表現している。筆者のガラス作品は覗いた中に彫刻があり、これらは虚構でありながら実在として見えることで、異世界を表象している。

言葉は人間の意識の産物である。その言葉の起源には無意識の産物である別の世界があると仮定し、透明なガラスの内側と外側との関係からこれを捉える。ガラス素材の厚みを空間として捉え、この空間の意味を考察する行為は、人工物の根源にあるアイデアを見ようとする事と同義である。

第2章では素材の特性の物質面と精神的な面を考証し、光の反射、吸収、屈折やガラスの組成を活かした作品展開が、確信的な視覚的效果をもたらすことを示した。表面の切削角度による屈折、鏡面研磨による内面反射により、ガラス内部が複層的に見える効果について実例を挙げて論述した。またガラス素材の歴史やリサイクル性を見直すことにより、今後のガラス工芸の持続可能な展望を示した。次にガラス工芸としての装飾の意義を「祈り」「非現実世界の視覚化」「制作者からの励まし」に求めた。これは装飾文様が表象するものが過去からの教えであり、非現実世界を視覚化する祈りであり、制作者からの励ましであるという考察か

ら得た結論であり、この装飾と作品との関係を論述した。

第3章では、筆者独自の虚実技法と虚彩技法について、そこに至る経緯と成果を示した。前者はガラスの透明性を活かし、文学や言説における言葉をモチーフに、遺跡を思わせる複雑な形態でガラス内部を造形する技法である。後者は内部彫刻に彩色し、ガラスに図柄を焼き付け、転写する技法である。これらの技法に関する実験とデータを提示し、その意義を考察した。

第4章ではこの技法を用いた修了制作に至る地平について論じた。文章を思考、理解するための制作を自我と認識し、素材との均衡について実例を挙げつつ論述しながら、本論文執筆時の参考文献の一つである、フーコーの『言葉と物』の一節を理解するための制作過程を紹介した。原初は密接であった言葉と物が、時代と共に離別していく関係に筆者は異世界を見、この理解を修了作品の一つとした。

第5章では、本論文の検証とこれに基づいた作品制作、そこから繋がる文学の連想の過程を示した。これは、他者の著作物と人工物であるガラスの関係から、筆者自身の著作物と筆者自身がガラスを原料として作成した素材へと考察の対象を転換することになり今後の研究に繋がる。

筆者の作品のガラス内部の形態は、文学や言説の顕在化であり、読解への思考過程であり、精神世界でもある。外部の形態は現代社会を意味し、その外部が内部に入り込んで人間は成り立っている。精神世界は、認識できても不可侵な領域である。それをガラス作品で示しつつ内部が外部に露出していく思考を終章で論じた。

筆者の読書方法に於いて文学、言説、その行間にある意味を理解する道程は多岐に亘る。ガラス内部を覗くことと、文章内にある言葉の起源や行間を推察することとの関係性を論述し、文学などの言説から発現した制作から、再び言説の世界に戻るその往環の過程を、作品とともに示しエビデンスとする。外界である文章を吸収、反転、反射してガラス作品としていることを修了制作をもって論拠とし、本論文の執筆行為自体を外界への還元とした。

#### (論文審査結果の要旨)

本論文は、文学や哲学や科学書などさまざまな書籍によって触発された思考と、ガラス作品の制作との往還の過程を丁寧に論じたものである。申請者は、文章を読んだときに得られるイメージを表現するため、あるいは文章の行間を読み取るため、また難解な文章の理解のために制作する。コンセプトからでも素材からでもなく、読んだ文章を起点として、文章を十分に理解し解釈するために制作に向かい、思考をガラス作品へと変換する。いわば「ガラス語で考える」制作過程とその分析に高い独創性がある。それに加えて、本論文は以下の点で優れている。

第一に、ガラスという素材と作品コンセプト、さらには文章読解からの造形思考との対応が的確に論じられている点である。透明なガラスは、内側と外側の形態を同時に表現することが可能であり、ガラスの内外の関係性と、申請者自身と外界との関係性が重層的に表現される。さらに、視覚的には内外が繋がっていても、塊のガラス内部には触れえないことから、現実世界と非現実世界の間にある異世界を表現する作品コンセプトに適しているという。素材の特性と制作をめぐる思考とが明確に関連づけられている。

第二に、ガラス素材の特性について、透明性や屈折率の高さ、表面処理による効果といった工芸素材としての魅力にとどまらず、ガラス造形に関わる環境負荷への疑問から、土地に根ざしたガラス原料、ガラス製品のリサイクル、リユース状況などの調査によって、ガラスで制作することの持続可能性まで射程を広げて論じている点である。実際に、海藻・貝殻・珪砂を含んだ砂を採取してガラス原料を手作業で作る試みもして、素材研究としての意味も有している。

第三に、申請者が独自に開発した、塊のガラス内部に造形する「虚実技法」「虚彩技法」「重層技法」へ至る経緯と、その具体的手法を開示している点である。内部造形の素材、焼成方法、使用するガラスカレットの大きさ、焼成温度と時間設定、高温に耐えうる着彩方法など、申請者が試行錯誤を繰り返してたどり着いた独自の技法の詳細を余すところなく開示している。これらについて特許申請したのも、本論文を

全文公開してこの技法が広まることでガラス造形の可能性を拡張しようとする意図ゆえである。その意味で本論文は社会的意義ももっている。

最後に、修了作品と論文とが十分な密度で結びあわされている点である。文学や哲学の理解のために作られた作品と、本論文をさらに深化させるための作品とが博士審査展に展示された。修了作品に至るまでの多くの作品を本論文に対するエビデンスとし、論文と作品とを行き来しながら、ガラスの厚みの中にアイデアを表現しようとする。作品と論文とが相互に支え合う、芸術系大学院ならではの博士論文となっている。

以上の点から博士学位論文として優れたものであると審査委員全員一致で評価し、合格とした。

#### (作品審査結果の要旨)

大の読書家である申請者は作品を「ガラス語」と称し、文章→思考→作品→思考→文章→作品というループを繰り返しながら、言葉や文章を理解するためのガラス制作を行なっている。工芸制作、ひいては絵画制作や彫刻制作に於いても作者自身の考え方や目的に沿って制作が行われるのが普通であるが、文章理解のためのガラス制作ということ自体、工芸作家としては特異である。

ガラス素材の特徴として申請者は「透明性」「厚み」「内側と外側」ができることから独自の技法を完成させインナースクラブチャー（虚実技法）と名付けた。ガラス技法の中のパート・ド・ベールと言う石膏型の中でガラスカレットを溶かす技法をもとに内側と外側の関係によって生まれる特徴的な造形法に彩色を加えて独特のガラス作品として存在感を示した。展示作品『NEBUR and NIGHT SKY』ではライティングの効果を取り込みガラス素材だからこそ可能な空間を孕む作品の効果を高めていた。作品『存在の地平 Thought scope of existence』『ことばとものI』『ことばとものII』これらの作品展開は観るものに、文献理解と作品が合致して伝わってくる秀作だ。文献はフーコーの「言葉と物」であるが、言葉に当たる数々のピースをガラスの溶融作用によって一つの作品にまとめ上げることによって、内と外の関係、装飾性、形の輪郭への解決を同時に実現させた。

作品『COSIMC INFLATION』は、申請者のオリジナル技法のインナースクラブチャーの一つの完成形と観て取れる。制作上、表と裏という意識が生まれやすい造形の中、そこを逆手にとった魅力をたたえた優品となっている。かたまりの造形とは異なった視点から環境問題にも配慮して生まれた未来志向の方向を感じさせる作品『RAVEN』におけるブリコラージュ的なガラスの扱いにも、今後の発展性を感じる。展示では壁面には言葉が提示されており、思考と作品世界を往来するように会場構成され見応えのある内容であった。申請者は海岸の潮溜まりの美しさ、不思議さに引かれた幼い頃の体験に端を発し、ガラスの透明性や厚みに異世界を見、極めて具体的な現象からガラスに惹かれていったように思う。それが本を読むこと、難解な哲学書などの文章を理解することと結びつき、実際のガラス制作へと結実し、作品は充分に革新的で魅力のあるものになっている。

ガラスが、かたまりとして透けること、彩色を含めての光に対して複雑な屈折を生み、光を封じ込むことなど、素材としての特徴を引き出した造形性の強い表現として作品を評価する。

文章→思考→作品→思考→文章→作品と作者は言うが、文献理解のための作品制作だったはずが、もはやガラス作品としてそれぞれアイデアを持って存在し始めているかのように感じた。

それぞれ、博士学位認定に相当する優れた作品として認定する。

(総合審査結果の要旨)

吉井こころは、自身の造形活動においてガラス素材を中心に用いて行っているが、本論文を通してその出発点がどこにあるのか、丁寧に思考の流れを追いながら客観的に記述した。彼女はあらゆる分野の読書が好きであり、文章を読む際にその理解を「ガラス語」という彼女が生み出した言葉により解釈していくという方法論をもとにしている。読書を通して得た文章の独自の理解方法として作品への展開方法を論じることで自身の制作論とし、同時にガラス造形におけるキルンワークを中心に新しい独自の技法的なアプローチを模索した。また、ガラス素材の魅力だけでなく、造形時における環境負荷、リサイクル、リユースなどが作品制作において生み出される問題点の考察を試みている。

博士審査会の展示風景は、自身の書庫を想起させる構成となっており、複数の作品が展示され、それぞれの作品の出発点となった今まで読んできた書籍の文章とともに展示されている。作品はガラスの塊状に鑄造を用いて制作され、外側の形と透明なガラスを通して見える「中子」といわれる部分の中空部分との対比があり「陰と陽」「凹と凸」の逆転を生み出し、作者は「中子」を独自の方法で着色することで、それらを印象的に強調する。申請者は、多くのガラス作品を制作しているが、それぞれの作品が生み出す世界から再び言葉への往来が行われ、新たな読書が始まり、新たな言葉と出会い、そしてガラスによる制作に続くというループが出現している。

吉井こころは、「ガラス語」という方法論を通し、自身の制作の過程を反芻し深め、また展開し新たな方向性を模索する。そのような経緯を本論文により再確認しつつ、次の作品制作へと展開していくことを論じたが、今まで自身で行っていた読書を通して生まれてきた疑問、アイデアを「ガラス語」と命名することで、ガラスによる作品制作を言語化できたのではないかと評価した。読書によって得られたアイデアは、作品と共にあって初めて意味を成すものであると感じ、美術系の博士論文としての一つの形を生み出している。

吉井こころの博士審査展での発表は、読書から得た言葉と作品制作の二つの取り組みを相互に繰り返すことで独自の作品世界を作り上げることに至った記録として、優れた論文と作品展示であることを評価し、審査会全員一致で、合格とした。